

平成27年度 第3回体罰を許さない学校づくり検討委員会要旨

1 日 時 平成28年1月20日(水) 15:00~17:00

2 場 所 神戸市総合教育センター701会議室

3 主な発言内容

<委員長あいさつ>

「指導者は学ぶことをやめたら指導することをやめなければならない。」「教育は意義深く、楽しいものである。」という先人の言葉の意味をもう一度かみしめ、謙虚さと向上心をもって取組を進めなければならない。

<平成27年度の本市の状況及び取組について事務局から説明>

- ・平成27年4月~12月までの報告件数、態様等について
- ・スポーツ体育課、人権教育課、指導課等の啓発・研修の取組について
- ・相談体制の整備(いじめ・体罰・子ども安全ホットライン及び学校における相談体制の周知)

<11月の研修会から 事務局より>

11月10日実施の「生徒指導・不登校担当教員等指導法研修会」での、山崎委員長の講話及び加藤寛教授(神戸親和女子大学)の講演について、参加した教員のアンケート結果報告。

<各委員より>

- 体罰自体は学校教育法で許されない刑法上の暴行であり、あってはならない行為である。有形力の行使にもあたらないような、ネグレクト・無視するなどの形で子供たちを傷つけているというようなケースもある。国際的な指導方法として確立されたコーチング理論は教育の世界でもっと広まればよいと思う。
- この研修に参加されている先生が、この内容を持ち帰り、学校全体として先生方が理解され、子供たちが守られていくという取組に学校がどう動いてくれるのか、その取組を聴きたい。
- スポーツ指導者として参加している。アンケート集計の中に「部活指導中に感情的になってしまう」とあるが、現場での指導の難しい状況を示していると感じる。子供の力を伸ばすために必要なのは、「知識をもつこと」と、もう一つは、「対象の生徒をよく知ること」だ。私も実際に学生を指導していて感じるのは、「生徒が自分とどれだけ向き合っているのか」、そして、そういうことを「教員がどれだけ生徒に要求しているか」ということである。教員が生徒の理解を進めるだけでなく、生徒自身が自分と向き合うようなことを教員が仕組んだり、見守ったりすることも必要だと思う。
- 校長として「体罰を許さない」という観点で毎月職員全体に話をしている。部活動の場面では、子供とノートをやり取りする中で子供が自身の活動を振り返り、目標を設定することができるよう助言をするシステムができてきていると思う。教員はすべてが体育・スポーツの専門家ではない。技術的な専門性をもった外部指導員を学校に招聘するときに、「学校部活動の方針」、「顧問の気持ち」、「子供たちの考え方」を外部指導員によく理解してもらい、ダブルスタンダードになることを少なくしていく、ということが必要だ。「静かな生徒指導」は難しいと感じる。指導者のどういう姿勢が大人として毅然とした、凛とした指導になるのか、と考えたときに、「正しい言葉、子供が理解できる言葉」で子供たちに丁寧に語るということではないかと

考えている。アンケートの中で「感情的になることがあるか」という項目があったが、これを即体罰につながる可能性として考えることは危険であると思う。

- 昨年度に、加藤先生のお話を聴かせていただいたときに、本校ではその内容をまとめ、校内のグループウェアで教職員間において共有した。「体罰は暴力行為である」という認識は浸透している。自分で課題を設定し、それに対して自分でどう考えていくのか、ということができない子供が増えているので、指導が難しい。生徒たちがおとなしいので、教職員がかえって何もしなくなった感もある。いわゆる「やんちゃ」な子供は減り、さまざまな課題をもった生徒がいるので、「特別な配慮を要する指導」に関する研修会に生徒指導担当教員も数多く参加し、一般的な指導に活かしていくようにしている。部活についてはコーチングについて今後もさらに研修を続けていきたい。
- 特別支援学校においては、言葉の指導に気を付けるように言っている。子供たちは障害によって理解できる部分とできない部分があり、教員は一人一人の障害や家庭のことなどを理解しているかどうか、が重要である。本校の先生方はチームで指導に当たるので、情報共有をしながら子供に向き合うことが必須である。しかし、コミュニケーションを取ることが苦手な教員もいる。このような教員が孤立しないように周囲がフォローすることも大切である。
- 先生方に体罰や暴力について敏感に考えていただいていることが分かった。しかし、親としては若干物足りなさを感じている。本当に指導しなければならないタイミングで指導することができているのだろうか。一律に線を引くのではなく、ケースバイケースで、教員をフォローする体制をつくってほしいと思う。
- 最近見かける光景で、子供が何かした時に「人に怒られるからやめなさい。」と、自分が悪者になりたくなくて、「第三者が怒るから」という叱り方をする母親が多いように思う。叱ることができない親と叱られ慣れていない子供が増えている。褒めることと叱ることという意味でのアメの部分とムチの部分を使い分けることができる先生が増えていかなければ、難しい状況がある。そのために子供をよく見てほしい。

<委員長まとめ>

教育者として大切なのは、「絶えず学ぶ」、「新しいものを吸収していく」、「絶えず襟を正す・謙虚さをもつ」、そして「指導者としての誇り・前向きな姿勢を絶えずもつ」ことだと思う。誇りとは、困難なことにも前向きに取り組む、逃げないということである。震災を経験した神戸から新しい教育を世界に発信する気持ちで取り組んでいくことができればと考える。

次年度もこの体罰を許さない学校づくり検討委員会を継続開催し、神戸の教育を見守っていききたい。